

第 6 号 卷 頭 言

広島国際大学心理科学部教職教室 主任 竹田 敏彦

ルソーは『エミール』の第4編の中で次のように述べている。

「わたしたちはこの地上をなんとという速さで過ぎていくことだろう。人生の最初の四分の一は人生の効用を知らないうちに過ぎてしまう。最後の四分の一はまた人生の楽しみが感じられなくなってから過ぎていく。はじめわたしたちはいかに生きべきかを知らない。やがてわたしたちは生きることができなくなる。さらに、この最初と最後の、なんの役にもたない時期には生まれた期間にも、わたしたちに残されている時の四分の三は、睡眠、労働、苦痛、拘束、あらゆる種類の苦しみのためについやされる。人生は短い。わずかな時しか生きられないからというよりも、そのわずかな時のあいだにも、わたしたちは人生を楽しむ時をほとんどもたないからだ。死の瞬間が誕生の瞬間からどれほど遠くはなれていたところでだめだ。そのあいだにある時が充実していなければ、人生はやっぱりあまりにも短いことになる。」¹

このルソーの言葉は重たい。人生の最初の4分の1と最後の4分の1を除き、最初と最後のは生まれた期間の4分の1のみが人生を楽しむことができる時だというのである。これを計算すると、 $2/4 \times 1/4 = 1/8$ ということになる。ルソーはこの人生の1/8においてさえも、人生を楽しむ時をほとんどもたないという。せめて人生の1/8くらいは充実させたいものである。

「自然によって定められた時期にそこ(子どもの状態←執筆者(竹田)による)からぬけだす」時期が思春期である。そして、「この危機の時代は、かなり短いとはいえ、長く将来に影響をおよぼす」ことになる。「ちょっとのあいだでも舵を放してはいけない。でなければ、なにもかもだめになってしまう」ことになる。ルソーはこの時期を「第二の誕生」と呼び、「ふつうの教育が終りとなるこの時期こそ、まさにわたしたちの教育をはじめなければならない時期だ」と述べている。²

この思春期におけるルソーの人生観、教育観、子ども観は、子ども期のそれとは大きく異なる。自然の要求に応える消極教育から危機の時代に応える積極教育への移行である。ここでいう積極教育とは、思春期に相応しい必要不可欠な教育であり、大人の(教師の)意のままに生徒を振り回すような教育ではない。ルソーの教育観が消極教育を基本としていることはいうまでもない。それぞれの時期に相応しい教育が自然の要求を無視することなく行われることこそがルソーの主張する教育論であると捉える。

ルソーは思春期の生徒の状況を次のように表現している。

「暴風雨に先だってはやくから海が荒れさわぐように、この危険な変化は、あらわれはじめた情念のつぶやきによって予告される。にぶい音をたてて醜酔しているものが危険の近づきつつあることを警告する。気分の変化、たびたびの興奮、たえまない精神の動揺が子どもをほと

¹ ルソー(著)、今野一雄(訳)『エミール 中』(岩波文庫 33-622-2) 岩波書店 1963 p.5

² 上掲書 pp.6-8 から抜粋

んど手におえなくする。まえには素直に従っていた人の声も子どもには聞こえなくなる。それは熱病にかかったライオンのようなものだ。子どもは指導者を見とめず、指導されることを欲しなくなる。」

このような時期に教師はどのようにして生徒を指導すればよいのか。本来のあるべき正攻法の教育で臨めばよいのである。正攻法の教育とは、ルソーやカントの教育論に見られるような人間観、教育観、子ども観を根底に据えた教育である。

広島国際大学の教職課程を履修している学生たちは、教育実習Ⅰ→教育実習Ⅱ→教育実習Ⅲ→教職実践演習のプロセスにおいて、大学での模擬授業やロールプレイング、中学校・高等学校での教育実習等を通して大きく成長している。学生たちは教職に就くときに備えるべく、教師力アップのための磨きをかけているのである。

広島国際大学の教職課程は現在、心理科学部(中学校「社会」「英語」、高等学校「公民」「英語」)、総合リハビリテーション学部(高等学校「工業」)、医療栄養学部(「栄養」)において履修が可能である。しかし、来年度の新入生から心理学部、総合リハビリテーション学部において、教職課程を置かないことが決定している。

このような中、教職教室のスタッフは、一人でも多くの学生を教員採用試験の合格及び国立大学法人の教育系大学院への進学を実現させるべく鋭意努力している。

心理科学部4年生(教職課程履修者26名)は、今年度の広島県公立学校教員採用試験(中学校社会科)に合格(1人)、兵庫教育大学大学院(3人)、鳴門教育大学大学院(2人)、愛媛大学大学院(1人)奈良女子大学大学院(1人)等の国立大学法人の教育系大学院に合格(7人)を決めるなど、成果を上げている。来年度以降も一層、その成果を上げるべく学生を支援していきたい。

末筆になりましたが、本教育論叢第6号発刊に当たり、ご寄稿いただいた教職課程に関する教職員及び学生の皆様に衷心より御礼申し上げます。